

松原市指定文化財調書

文化財の種類：有形文化財 美術工芸品 彫刻

記号番号：彫第5号

指定年月日：令和4年(2022)6月24日

名称・員数：らいごうじ もくぞう あみだ よらいりゅうぞう 来迎寺 木造 阿弥陀如来立像 1躯

所 有 者：宗教法人 来迎寺

所 在 地：まつばらし たんなん 松原市丹南3丁目1-22

年 代：へいあん 平安時代中期（10世紀）

形状・寸法等：一木造 像高 102.4 cm

〔説明〕

本像は、像高 102.4 cm(3 尺 3 寸 7 分)、髪際高 94.2cm(3 尺 1 寸)をはかる阿弥陀如來立像である⁽¹⁾。左手は垂下して第 1・2 指を捻じ、右手は屈臂し第 1・2 指を捻じて来迎印を結ぶが、両手首先は後補である。頭体幹部及び右前脣半ば、左手首まで、足先半ばまでがカヤと思われる一材から彫出されている。背面の襟下から内削りを施し背板をあてており、像底に設けた柄孔を台座の雇柄に挿入し固定する。保存状態は良く、当初の姿をよく残している。面部や着衣の一部に後補とみられる彩色下地を見せるが、当初は素地、あるいは檀木の色を模した檀色像であったと想定される。

頭部は地髪と肉髪の境目が不明瞭で、大振りな螺髪を刻む。頬の張った面相部に目尻が上がる切れ長の細い眼とよく通った鼻筋を彫出し、厚みのある上唇などの表現も相まって、厳かな表情を見せている。引き締まった体軀には衲衣、偏衫をまとい、着衣に見られるえもんは浅く鎬立った稜線と深い彫りが交互に表され、両袖の裾がやや外側に翻る。厳かな表情や衣文の表現などから、制作時期は

平安時代中期(10世紀)とみてよく、滋賀県の新福寺伝阿弥陀如来像⁽²⁾をはじめ、延暦寺根本中堂薬師如来像の模像とされる一連の作例に近い造形性が窺われ、本像もその系譜に連なる可能性がある。来迎印を結ぶ阿弥陀如来立像とすれば早期の例となるが、両手先は後補であるため、当初は天台系薬師として造立された可能性が高い。

本像は、現在、丹南の来迎寺(丹南本山来迎寺)に客仏として安置されているが、かつては堺市美原区大保にある西福寺の本尊であった⁽³⁾。西福寺は平野(大阪市平野区)の大念佛寺を総本山とする融通念佛宗寺院で、江戸時代には中本山である来迎寺の末寺であった。開基は不明であるが⁽⁴⁾、享保8年(1723)に西福寺の看坊から差し出された「一札⁽⁵⁾」が残されており、この時期までに寺号を有したこととは明らかである。ただし、天保14年(1843)「大保村寺社庵改帳⁽⁶⁾」の「西福寺」には「延宝六戌午年本多出雲守様御検地帳ニ泉福寺与記有之候」とあり、「泉福寺」が同じ寺院であるとされる⁽⁷⁾。そうすると、寛文6年(1666)「河州丹南郡丹南村来迎寺末寺御改帳⁽⁸⁾」に見られる「泉福寺」が寺号の初見となる。なお、これより前の寺歴は不明であるが、大保には古代寺院の伝泉福寺(伝大保廃寺)推定地が存在し⁽⁹⁾、平安時代末にはこの一帯に4カ寺が存在したことなどから⁽¹⁰⁾、本像は古くからこの地で人々の信仰を集めていたと考えられる。

いずれにせよ、本像は平安時代中期に遡る作であり、高野山に近く真言宗の影響が強い松原市以南にあって天台宗の影響が見られる作例は極めてまれで、南河内の仏教文化を考える上で貴重な資料といえる。

以上により、来迎寺木造阿弥陀如来立像は、松原市を代表する平安時代の貴重な仏像彫刻というだけではなく、美術史学及び歴史学の研究においてきわめて学術的価値が高く、本市指定文化財にふさわしい。

[調書]

[形状]

本躰：肉髻珠、螺髮。耳朶不貫、三道を彫出する。衲衣、偏衫、裙を着ける。

右手は肘を曲げて掌を胸前に掲げ、掌を前に向けて第1・2指を捻じ、他指を軽く曲げる。左手は垂下して掌を前に向け、第1・2指を捻じ、他指を伸ばす(来迎印)。両足をやや開いて台座上に直立する。

光背：舟形光背

台座：蓮華座

[品質構造]

針葉樹系材(カヤ材か？) 一木造 彫眼

頭体幹部及び右前脇半ば、左手首まで、足先半ばまでを一材より彫出する。

[保存状況]

後補：両手先以下、両足首先、台座、光背、面部や着衣の一部にある彩色下地
および彩色(茶褐色系)。袖裾部や背面に別材の埋木。

[時代]

平安時代中期(10世紀)

[法量細目]

髪際高 94.2 cm 頂一顎 18.6 cm 面長 9.3 cm 面幅 9.1 cm

耳張 12.3 cm 肩張 23.2 cm 胸奥 13.9 cm 肘張 28.9 cm

袖裾張 35.0 cm 腹奥 14.6 cm 裳裾張 28.2 cm

足先開(内) 5.1cm 足先開(外) 16.1cm

台座高 42.8cm

(1) 法量細目は平成30年度(2018)に実施した来迎寺の調査成果による。法量細目以外の情報は報告書に掲載。植村拓哉「(1)彫刻」公益財団法人元興寺文化財研究所編『松原市内所在の文化財総合調査 1-丹南・来迎寺-』(松原市教育委員会 2020年)14・128・132・134頁。

(2) 滋賀県大津市月輪所在の新福寺(浄土宗)の本尊。来迎印を結ぶが、両手先は後補であり当初

は薬師如来であったと考えられている。大津市教育委員会『大津の文化財』(大津市教育委員会 1998 年)257 頁、伊東史朗『日本の美術』479 十世紀の彫刻(至文堂 2006 年)38~41 頁。

- (3) 西福寺(経緯度 34.548553,135.557414)の什宝物は平成 16 年(2004)に来迎寺へ移され、堂宇は平成 17 年に解体された(来迎寺方丈塙野則行氏のご教示による)。なお、西福寺が廃寺となる以前に美原町史編纂委員会により美術工芸品の調査が行われている。高橋平明「彫刻」美原町史編纂委員会編『美原町史』5 別編(美原町 2004 年)282~283・412 頁。
- (4) 『大阪府全志』には「西福寺は融通念佛宗来迎寺末にして阿弥陀仏を本尊とす。由緒は詳ならず。境内は七拾四坪を有し、本堂・庫裏・納家・門を存す。」とある。井上正雄『大阪府全志』4(大阪府全志発行所 1922 年)540 頁。
- (5) 来迎寺文書 906 「一札(大保村西福寺看坊仕るにつき)」による。差出人は大保村西福寺看坊含良で、証人は堺木下新介。宛名は本山丹南村来迎寺御役者である。服部光真・酒井雅規「(1) 古文書」公益財団法人元興寺文化財研究所編『松原市内所在の文化財総合調査 2-丹南・来迎寺-』(松原市教育委員会 2021 年)54 頁、所収。
- (6) 美原町史編纂委員会編『美原町史』4 史料編III 近世・近現代(美原町 1993 年)661~663 頁所収。
- (7) 寛文元年(1665)~明和 6 年(1769)の文書を書き写した来迎寺文書 3876 「江府下向覚書」に「丹南來迎寺末寺覚」が収められており、そこに「泉福寺トアリ 泉福寺^{サイ}」とある(元資料を確認。報告書では振り仮名を翻刻せず)。年不詳の覚書であるが、「大保村寺社庵改帳」と同じく泉福寺と西福寺が同一寺院と考えられていたことを示す史料である。前掲註(5) 文献 298 頁、所収。
- (8) 前掲註(5)文献 201~203 頁、所収。
- (9) 伝泉福寺(伝大保廃寺)は大保地区にある溜池の寺池(座標 34.549247,135.556749)一帯が推定地であり、文永 6 年(1269)の『金剛仏子觀尊感身学正記』や「西大寺末寺帳」に見える河内国泉福寺を当てる説がある。また、大保地区では奈良時代後半から鎌倉時代の瓦が採集されている。美原町教育委員会生涯学習課文化財保護室「美原地区の古代寺院」美原町史編纂委員会編『美原町史』1 本文編(美原町 1993 年)316 頁、大阪府教育委員会『岡 2 丁目所在遺跡発掘調査概要報告書』(大阪府教育委員会 1993 年)56~64 頁。
- (10) 承安 2 年(1172)「佐伯景弘持経者巻数注進状」には河内国丹南郡黒山郷の寺院として長和寺、学音寺、花林寺、薬師寺の名が挙げられている。長和寺は堺市美原区小寺に所在する平松寺の前身とされるが、他の 3 カ寺については不明である。松原市史編さん委員会編『松原市史』3 史料編 1(松原市 1978 年)250~251 頁、所収。河音能平「中世美原町域の寺社と僧」美原町史編纂委員会編『美原町史』1 本文編(美原町 1993 年)347~350 頁。



【写真 1】 来迎寺木造阿弥陀如来立像



【写真 2】 来迎寺木造阿弥陀如来立像（上半身）



【写真 3】 来迎寺木造阿弥陀如来立像（頭部左側面）



【写真 4】 大保・西福寺での安置状況(1)



【写真 5】 大保・西福寺での安置状況(2)



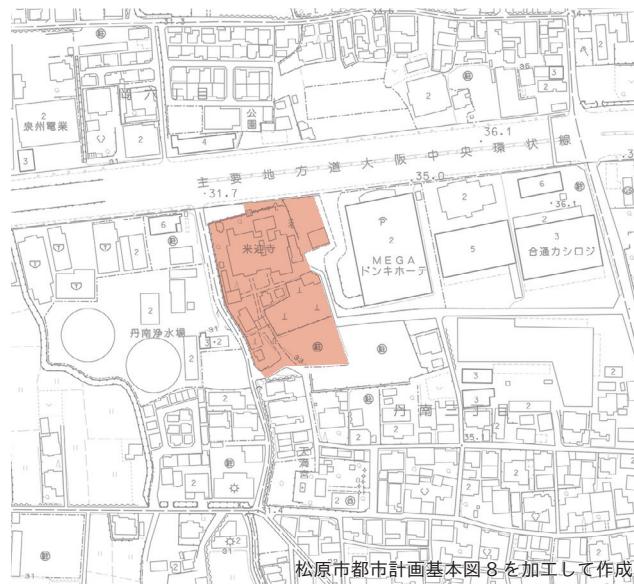
【写真 6】丹南・来迎寺 外観(東から)



【図 1】来迎寺及び西福寺跡位置図



【写真 7】丹南・来迎寺 本堂(南から)



【図 2】来迎寺位置図(1:2500)